

教員活動状況報告書

提出日：令和 6 年 3 月 1 日
 所 属：獣医 学部 獣医 学科
 氏 名： 小澤 秋沙 職位： 講師
 役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト（必修，選択）（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して数行で説明する。（分量の目安：2～5 行（80 字～200 字）（科目表以外））

※分量（字数）はあくまで目安ですので，超えても構いません。内容を優先して下さい。（以下同じ）

獣医組織学実習：各器官、組織における細胞の形態的特徴及び組織化学的特徴を理解することを目的とする。

動物解剖・生理学実習：比較解剖を通して動物毎の解剖学的特徴を理解する。また各器官、組織を構成する細胞の形態学的特徴を理解することを目的とする。

専門ゼミ：研究活動を通して、考える力を培うことを目的とする。

獣医発生学：獣医解剖学及び獣医組織学で学んだ身体構造がどのように形成されるのかを理解することを目的とする

科目名	学科・専攻	必，選，自	配当年次	受講者数
獣医組織学実習	獣医学科	必修	3 年	150
動物解剖・生理学実習	動物応用科学科	必修	2 年	140
獣医学特論 I	獣医学科	必修	5 年	1
獣医発生学	獣医学科	必修	2 年	160
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3 年	4

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。（自分の教育アプローチの説明：なぜやっているのか，自らの信念，価値，目指すもの）（分量の目安：8～12 行（320 字～480 字））

解剖学分野の教育を通して身体を構成している器官の位置や構造などを表す名称を学ぶことで動物の専門科目における共通言語として習得することが第一目的である。しかし、解剖用語をただ単に暗記することが目的ではなく、各名称に含まれる意味を理解しながら、解剖

分野のあとに学ぶ専門科目への意識付けをできるように心がける。

ただ知識として暗記するだけでなく、体の仕組みを詳細に理解するための基礎として理解させる。知識だけを詰め込み応用することが苦手な獣医師や社会人にならないように、持っている知識の応用を意識させ、自ら考え行動できる人物を育成する。

考える切掛けを与えるために、最初からすべての知識や答えを伝えることはせず、なぜこうなっているのかを問いかけながら、徐々にヒントを出しつつ学生自らが答えに行きつけるように誘導するよう心がけている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

教育の目的と目標（これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法）（分量の目安：15～24 行（600 字～960 字））

実習でのスケッチの確認：質問する学生には双方向の対応が可能であるが、質問をしない学生の理解度を図り、もれなくすべての学生と双方向の実習にするために、個々の学生のスケッチ確認を行っている。

実習中の進行具合の把握及び助言：対面で実習が行えた場合は実習中の進行具合を確認し、必要がある場合は教員から学生に声をかけ、理解を促す。自ら質問を積極的に行わない学生に対しても気づきを与えられるようにしている。

実習内容の理解度の確認：実習内容の理解度を実習ごとのスケッチの確認と 2 単元分毎の試験で行なっている。試験では実習内で習熟すべき項目について、組織写真をスライドに投影し、理解度を確認している。

獣医発生学：獣医発生学は解剖学分野の解剖学および組織学の知識が備わっていることを再確認することを学生に意識づけるように講義を行なっている。成体での身体の構造がどのようになっているかを想起させ、その構造が一つの受精卵からどのように形成されるのかを理解できるような説明をするように心がけている。

アクティブラーニングについての取組

実習自体がアクティブラーニングの一つだと考える。獣医組織学実習では学生からの質問への対応は答えを学生自身が導くようにしている。

ICT の教育への活用

獣医組織学実習では 5 年前から実習中に教員及び TA が iPad を携帯し、学生からの質問に対して、模範となる組織像を示しながら対応している。プロジェクターでの組織像よりも鮮明な写真を使用して、1 対 1 の対話形式で対応することが可能であるため、学生からも好評である。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の目安：15～24 行（600 字～960 字））

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A）

講義、実習の目的をはじめに解説することで内容の理解を促している。

②学生の理解度の把握（A）

講義科目での中間テスト、実習での小テストで理解度の把握に努めている。

③学生の自学自習を促すための工夫（B）

講義で不明だった点についての質問をするように努めている。

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A）

質問内容に加えて、理解を深められるように回答をするように努めている。

⑤双方向授業への工夫（B）

実習中に理解が足りていない様子の学生には質問される前に声がけをするように努めている。

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記載してください。）

総合獣医学を担当していないため特になし

5.学生授業評価（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

予習復習の項目が低い結果であったが、実習では試験を4回に分けたことで、復習の時間が増えるようにした。獣医発生学では、講義内容に関する解剖学及び組織学についての小テストをすることで予習を促した。

② ①の結果はどうでしたか。

小テストによる予習については大多数の学生がよく対応していたが、受験しない学生も見受けられた。また、予習内容を講義の理解につなげているかは把握できなかった。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

予習のための小テストについて、今年度は講義内容3～4回分を3週間、何度でも受験できるようにしたが、受験期間を短くし、テスト回数を増やすことで、繰り返しによる予習復習効果が得られると考える。

6. 学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

（参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。）

講義が体系的になっていることを意識づけされるようにしている。また学生の習熟度を上げるためには毎年学生が苦戦している部分については強調して説明し、重要な点についての意識付けを心がけ、質問に対する対応ではただ答えるだけではなく段階を踏んだ誘導を行い学生の理解を深めるようにしている。この復習講義は教員が学生に質問し、学生からの答えに教員は内容を追加するというようにアクティブラーニング形式で行った。これらのことを実施するために、コミュニケーションに重点を置き、学生が組織学に興味を持てるように取り組んでいる。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

日本獣医学会解剖分科会内での教育についての情報共有

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）（分量の目安：1～2行（40字～80字））

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。（分量の目安：3～6行（120字～240字））

学習意欲の高い学生のさらなる成長を促すため、講義、実習においても受け身ではなく「考えること」が身に付けられるような双方向の教育を目指したい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。
講義プリント

参考

※ ティーチング・ポートフォリオにおける自己記述を裏付けるエビデンス例

（「実践ティーチング・ポートフォリオ スタータブック」（大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会 編）から引用）

（自ら作成するもの）

1. 授業に関するもの

シラバス、小テスト、宿題、レポート課題、試験問題、教材（配布資料、パワーポイント資料など）

2. 教育改善に関するもの

（教育に直接貢献する研究、FD プログラムなどへの参加記録、教育の工夫を示すもの（複数年のシラバス等）、教育活動関連の補助金の獲得

（他者から提供されるもの）

1. 学生から

授業評価データ、授業に関するコメント（授業評価の自由記述やメールのやりとり等）、卒業生から授業や教育についてのコメント

2. 同僚から

授業参観の講評、作成教材についての意見、同僚のサポート実績

3. 大学／学会等から

教育に関する表彰、教育手法等に関する講演の記録及び招聘の要請書類、カリキュラムやコースの設計などについての評価

（教育/学習の成果）

授業科目受講前と受講後の試験成績の変化、学生の小論文・報告書、学生のレポートの「優秀」「平均的」「平均以下」の例、特に優秀な学生についての記録、指導学生の学会発表などの成果、学生の進路選択への影響についての事実、学生のレポートの改善の軌跡